

Батькам
両親に捧ぐ

まえがき

初めて日本に来たのは、2006年9月、学期型の日本語学習プログラムでした。それが私にとって初めての海外渡航でした。そして、日本の人たちがウクライナのことをほとんど知らないということを知ったのも、この時が初めてでした。

私が「ウクライナから来ました」と言うと、日本の友人たちからは「どこの国ですか?」「ロシアから来たんでしょ」と尋ねられました。マトリョーシカ人形・ロシア文学の古典・クラシック音楽など、独立後のウクライナにおいて私が教えられてこなかったものの、なぜか同時に私の「常識」として指摘されたものを、多くの日本人が口にしました。

また、多くの日本人は、私がロシア語ではなくウクライナ語を母国語としていることに驚きました。

その一方で、ロシア語はロシア帝国とソ連の一部であったウクライナの複雑な歴史におけるいわば「遺産」のようなものであり、独立後も幼少期から青年期にかけては常にロシア語のほうがウクライナ語より優遇されていたため、ロシア語は私にとって外国語でありながら、実際には勉強することもなく、ほぼ完璧にロシア語を理解しているという私の説明にも驚いていました。

長期にわたり、ウクライナの歴史・文学・芸術はロシアのものとして知られたか、それともまったく知られていないかのどちらかでした。

著名で多くのウクライナ人に好かれているウクライナの現代詩人・作家であるリーナ・コステンコ¹は、フランスのレジオン・ドヌール勲章を、2022年に受賞

注1) リーナ・コステンコ (Ліна Костенко) (1930年生まれ) は1960年代以降活動しているウクライナ詩人・作家・ソ連反体制派。コステンコの詩は日本で原田義也により訳されている(リーナ・コステンコについて「現代のマドンナは何を祈るかーリーナ・コステンコの詩的世界ー」『明治大学国際日本学研究』10(1)号, 2017、『ウクライナを知るための65章』2018などを参照)。

した際、「この賞は大きな驚きでした。だって私は世界の知られざるウクライナ文学に属しているからです」と強調しました。

ウクライナは、つい最近まで日本人にとってあまりよく知られていない国でした。2021年初頭、ウクライナ研究所は「海外におけるウクライナに対する認識：日本」という分析レポートを発表しました。このレポートは、日本におけるウクライナやウクライナ文化に対する考え方、文化外交の分野におけるウクライナと日本の協力の可能性を明らかにすることを目的としたものでした。調査の結果、ウクライナの歴史や文化に対する日本人の認知度は極めて低いことが明らかになりました。回答者の中には、文化・教育・科学機関、地方・中央官庁、外交団、国際機関などの人たちが含まれており、多くの一般的な日本人は、世界地図におけるウクライナの位置さえ把握していませんでした。より詳しい日本人は、ウクライナを主に旧ソ連と結びつけ、2021年になっても、ウクライナの歴史や文化をロシアの歴史や文化の一部と認識していました。ウクライナ文化の特徴や人物について詳しく説明できるのは、ごく一部のウクライナの専門家や文化的エリートの人たちだけでした。

ウクライナ研究所の調査によると、このような意識の低さの主な原因は、日本文学におけるウクライナのイメージが、長い間、ソ連・ロシアのプリズムを通してのみ形成されてきたため、情報が限られていることであるとわかっています。ウクライナの独自の歴史、そしてウクライナと日本の関係は、1991年以前はソ連の文脈の外には存在しなかったとされています。その結果、現代ウクライナに対する認識は、ソ連の伝統の精神、つまりロシアの影を通して存在し続け、そして何よりも、現代ロシアの情報リソースを媒介にして、ロシアで形成されたイデオロギーや社会的価値観の立場から解釈されることが多くありました。それはもちろん、日本におけるウクライナの誤ったイメージの形成につながっています。

初めて日本に来た2006年以降、日本で私は「ウクライナはロシアではない」としばしば説明しており、ウクライナに帰国し2012年に日本に在住し始めるまでの間も、この日本におけるウクライナに対する歪んだイメージの原因についてずっと考えさせられ続けていました。そのことが私の国民的アイデンティティや「国民単位での自分」を理解しようとする気持ちに確実に影響を与えました。

ウクライナが日本ではあまり知られておらず、誤解されている国であることを

実感した私は、2019年に「在日ウクライナ人の言語とアイデンティティ」と題した自身の研究をついに開始することになりました。半構造化インタビューという調査手法を用いて、言語学者として、ウクライナ人の言語アイデンティティや言語意識の変化について把握することはもちろん重要でしたが、それと並行して、「ウクライナ人は日本では自分を誰だと認識しているのか?」「ウクライナ人は日本でどのように認識されているのか?」「ウクライナ人の国民的アイデンティティは、数年間の滞在を経てどのように変化するのか?」といった疑問に対する答えに出会いました。

2019年9月から2022年3月にかけて、年齢も職業も異なり、日本に1~28年間住んでいる47人のウクライナ人にインタビューすることができました。数百時間に及ぶ録音を分析した結果、私が見ているのはウクライナ人の言語と生活に関する単なる社会言語学的なものではなく、ウクライナと日本の両方に関してユニークで時折根本的に異なる見解を持つライフストーリーであることがわかりました。

インタビュー回答者は、人生経験も職業経験もさまざまです。私のように日本語を勉強するために来日し、日本文化に慣れ親しんでいるため、日本での生活がとて快適だという人もいれば、日本企業への就職が決まり、日本社会の特殊性を十分に理解できないまま、日本での生活を英語だけで過ごしてきたという人もいます。また、日本人と結婚して日本人とウクライナ人のハーフの子どもを持ち、家庭における精神的な苦労があるにもかかわらず、日本以外で暮らすつもりはないという人もいます。

このようなウクライナ人のストーリーは、ウクライナ人の個人・文化・宗教・国民アイデンティティを明らかにしています。日本で暮らしている中で、彼らが受けた最初によくある質問は「どこから来たの?」という質問でしょう。そして、私がそうだったように、日本人にはまったく知られておらず、ソ連とりわけロシアと強く結びつけていたウクライナという国について伝える時、回答者たちはそれぞれ自分の国民的アイデンティティについて認識を深めていったのです。彼らの多くにとって、日本でしばしば経験しているウクライナとロシアの同一視、そして2014年のロシアによる侵攻とクリミアの不法な併合によるウクライナの悲劇は、国民単位で自分が何者であるかを理解する礎となるものと考えています。

こうして、回答者のストーリーを分析しながら、筆者は本書の執筆を思い当たったのです。とはいえ、本書の序盤を構成し始めた2020～2021年当時、分析面での予測はともかく、「ユーロ・マイダン」直後の2014年に始まり、実質的にウクライナ東部だけで続いていたロシアによるウクライナに対するハイブリッド戦争が、2年半後には全面的な戦争となり、第二次世界大戦以降のヨーロッパで最も悲惨で過酷な戦争になるとは思いもしませんでした。

2022年2月に「ウクライナ人とは誰なのか、なぜ彼らは『偉大で無敵な（皮肉ですが）』ロシア軍に抵抗しているのか」という問いが、世界中の新聞の紙面を飾ることになるとは、その時の筆者は知る由もありませんでした。

そして2022年には、この戦争を始めたわけではなく、この戦争のありとあらゆる戦線で母国を守ることを選んだウクライナ人が、母国の領土のためだけでなく、自分たちのアイデンティティのために戦っていることが全世界の知るところとなったのです。人間のアイデンティティは、民族・宗教・文化・職業・ジェンダー・個人など、さまざまな属性を表しています。国民的アイデンティティは、ある国に住む人々が共有する、その国や地域における共通の文化や歴史、言語、宗教、価値観などの要素に基づく集団認識です。

そこで本書では、回答者たちの経験に基づいて、「ウクライナ人のアイデンティティとは何なのか？」という問いに答えてみたいと思います。

本書はウクライナという国をもっと知りたい方々向けとして考えているため、なるべく簡単に説明するようにします。そして、ウクライナ人の国民的アイデンティティをもっとも表している、同時にロシアとはまったく異なるものとして解釈されているウクライナ人の宗教・言語、そして本書執筆現在も続く戦争の原因を中心に説明していきます。

2023年11月

ユリヤ・ジャブコ

謝辞

本書を執筆するにあたり、多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。その中でも、特に重要な関係者の皆様に対する感謝の意をここに表させていただきます。

まず、2019年から2023年までに本研究の対象者となった47人の在日ウクライナ人の調査協力者に深く感謝いたします。そして、フィールド・ワークの実施にあたり、インタビュー実施、協力者の紹介、写真の提供などに何度もご協力してくださった「NPO法人日本ウクライナ友好協会 KRAIANY (クラヤニ)」、 「NPO法人日本ウクライナ文化協会」 「Stand With Ukraine Japan」の代表者、ウクライナ日曜学校「ジェレルツェ」と「ベレヒーニャ」の先生、聖ユダミッションのポール・コロルク神父にもお礼を申し上げます。皆様のご協力のおかげで、日本ではまだあまり知られていないウクライナへの理解が深まることを信じております。

次に、ご多忙の中、本書に関する貴重なコメント・ご意見をくださった日本大学危機管理学部の田上雄太先生、ウクライナ研究会の國谷光司様、茨城キリスト教大学文学部の三輪健太先生、山口大学人文学部のオリハ・カテリーナ先生にお礼を申し上げます。部分的に日本語のチェックを行ってくださった Ukraïner (ウクライナー) 日本語版の編集者の藤田勝利様、多くのウクライナ風景の写真を提供してくださった友人のユリアーナ・ロマニウ様にも感謝いたします。

また、2019年から2023年まで在日ウクライナ人の生活や日本・ウクライナ関係史に関する共同研究およびウクライナ全国紙の『День』(『デーニ』)において共著で記事執筆にご協力してくださったりヴィウ国立大学ジャーナリスト学部のオリハ・クヴァシニツァ先生にも感謝いたします。そして、2009年に筆者にリヴィウ国立大学の大学院で社会言語学の世界を開いてくださったリヴィウ国立大学文学部のハリナ・マツユク教授にもお礼を申し上げます。

本書の出版にさまざまな段階でご協力してくださった茨城キリスト教大学や大

学教育出版の方々に、深謝の意を表します。

さらに、私の日本とウクライナの家族、そして友人にも心から感謝いたします。特にロシアによる全面的な戦争が始まってから、皆様の絶えないサポート、励ましや理解がなければ、本書の執筆は実現できなかったと思います。

最後に、本書をお読みいただいている読者の皆様にも感謝の意を表します。本書の内容に対する興味を持っていただくことがウクライナ支援につながります。なぜならウクライナの支援はウクライナの理解から始まるからです。